

「臥す」人々―日常の文学的形象―

中 川 正 美

一 はじめに

意外なことに平安の散文作品には「臥す」がそこそこに纏綿と認められ、多用されている。散文作品ではどのような状況なのか、「独り臥し」「いたづら臥し」などの名詞、「独り臥しがちなり」の形容動詞、そして「臥し暮らす」「臥しまろぶ」「入り臥す」「添ひ臥す」などの複合語も含めての延べ語数は、

竹取物語五 伊勢物語六 大和物語七 平中物語一 篁物語四 蜻蛉日記一七 落窪物語九六 うつほ物語九四 和泉式部日記一一 枕草子二五 源氏物語二二三 紫式部日記六

のように認められる(1)。

複合語といっても「臥す」が前項の場合とはともかく、「臥す」が後項で、前項が「言ふ」「思ふ」「聞く」などの知覚動詞の場合、文脈上、「思ひ、臥す」か「思ひ臥す」か、迷う事例が出て来るが、思惟の内容が具体的に語られ、それを「思ふ」で受けている場合は「思ひ、臥す」とした。

「臥す」の類義語には「伏す」があるが、「臥す」が横たわる意であるのに対して、「伏す」は身体を折って小さくする、つまり、上体をかがめて低くなる意で、「うつぶし臥す」「かたはら臥す」などの、下向きや横向きを表す語と接続する表現が複数の作品に認められるから、「臥す」に下向きや横向きの意があるわけではない(2)。女君が男の侵入などの突然の事態に思わず「ひれふす」のは、衝撃にとっさに身体を

折って逃れようとする「ひれ伏す」と考えられ(3)、枕草子で、清少納言が荒海の屏風を怖がって「かくれふす」のも「隠れ伏す」と考えた。

こうして散文作品を概観すると、作品の長さからすれば落窪物語に突出して多用されていることが作品の性格を表出しているとはいえ(4)、短い作品であっても、認められない語も多々あるなかで、それなりに認められるということは決して小さなことではない。おおむねどの作品にもその長さに比して「臥す」が見出されるということは、「臥す」がいわば基礎語のようなもので、日常生活を構成する、生活語彙であつたからではないか。

では、文学作品の「臥す」は日常を表出するだけなのか、といえば、決してそうではない。それぞれの作品なりに、ある状況として文学的に形象化されている。そうした文学的営為はどのように行われ、どのように文学たらしめているのか。もちろん、現存する仮名作品は、枕草子や蜻蛉日記、紫式部日記などの現実に立脚したものであつても、作品である以上、なにがしかの虚構が入りこんでいるだろう。逆に、歌物語や作り物語の虚構であつても、日常性の上に立って構築されているのだから、畢竟そのなかに日常を透き見ることはできるだろう。まず、作中の「臥す」に日常性の片鱗を窺い、そこからの文学的形象を考えてみたい。

さて、「臥す」がどのような意味合いで用いられているかという点、大別して、

A 就寝 B 病臥 C 横臥 D 情交 E 常時

の五つの用法が認められる。Aの「就寝」は横たわって眠りに就く動作で、睡眠の意に、Bの「病臥」は病氣や気分の悪さなど体調が良くなく

て横たわる意に、Cの「横臥」は、まさに身体を横たえている場合に、Dの「情交」は一对の男女が共に横たわる「共臥し」の意に、Eの「常時」は「起き」と対句になって「起き臥し」「臥し起き」「起きても、臥しても」などと、常に同じ状態である意に用いている。

前稿ではDの男女の関わりを示す「情交」から、源氏物語に先行する作品をみてきた（4）が、本稿では、A就寝 B病臥 C横臥を取りあげ、日常をどのように形象化し、文学に昇華しているかをみていきたい。

二 「臥し」て眠る位置

Aの睡眠を表す「就寝」は、日常ではどのように行われていたのだろうか。

①女房二人ばかり童など、長押に寄りかかり、また下ろいたる簾に添ひて臥したるもあり。（枕草子、南ならずは東の廂の・三三二）

②侍従、曹司へも行かて、御前に臥しぬ。（うつほ物語俊蔭・一一二）

①の枕草子では、童や女房が長押に寄りかかったり、御簾に添って横になったりして眠っている。「几帳の方に添ひ臥して」（心にくきもの）など、几帳のもとで横になるというのも多い。これらは宮仕えでの就寝形態であつたろう。乳母も「御前に添ひ臥し」（身を替へて天人などは）

「親の前に臥すれば」（かしこきものは乳母の男にこそあれ）と主人の子や親など、人に添い臥している。紫式部日記では、弁の宰相君が自身の局で硯の筥を枕にして昼寝しているし、大和物語一〇三段では帰宅した平中が何かに「寄り臥し」て眠っている。これらはしばしの睡眠で、平中が寄り臥したのは二階厨子か何かであろう。「添ひふす」が几帳の裾や御簾など低い物に隠れるように身体を添わせて眠ることなのに対して、「寄り臥す」はやや丈のある調度などに寄りかかってまどろむことをいうとおぼしい。②は仲忠が自身の曹司にも行かずに、両親が共臥し

している母屋の廂で臥したと語っている。新編全集では親子三人が同じ所で眠る幸福を表すと注しているが、どうであろうか。父の宿直をする、権力機構のなかで生きる官人としての行動とは考えられないか。

また、後撰集八四五番の詞書では、藤原成国が「人の許にまかりてはべるに、呼び入れねば簀子に臥し明かして、遣はしける」と、想いを訴えても受け入れられず、簀子で夜を明かしたとある。日常では、暑熱の厳しい夏に「端にうち臥し」と廂に出て眠る場合もよく認められる。

③この御方の続きなる廂二間曹司には得たりければ、同じやうなる所はかたじけなしとて、落窪一間をしつらひてなむ臥しける。

（落窪物語巻一・一二二）

この「臥す」は睡眠行為ではなく、女童あこぎの就寝場所を表している。あこぎは落窪の君実母の生前から仕えているのだが、嫡腹の三君に重宝され、三君の部屋続きの廂に二間幅の曹司を与えられた。けれども、三君と同じような所は畏れ多いと、廂より低い半分の広さに造って寝場所としたというのだが、これは三君への言い訳で、落窪の女君が廂の先の落ち窪んだ二間に住まわせられているのに憚っての行為であつた。生活の場をいう「臥す」を語ることで、あこぎの女君への忠誠と、三君のみならずおそらくは継母をも納得させる弁舌の機転で韜晦させる、世渡りの妙を持ち合わせている侍女なのだと紹介し、この先、女君のために活躍することを期待させる表現である。

④夜更けて、月の窓より漏りたりしに、人の臥したりしもが衣の上に、白うて映りなどしたりしこそいみじうあはれとおぼえしか。さやうなる折ぞ、人歌詠むかし。

（枕草子九月二十日余りのほど、初瀬に詣でて・三五〇）

この枕草子では長谷寺に参詣した清少納言が疲れて寝入った夜更け、目を覚ますと、眠っている人々の衣に月光が差し込んで白く映っている光

景に感動している。紫式部日記で「臥したまへる額つき、いとらうたげになまめかし」(二二八)と取り上げているような、眠っている女房の美ではなく、衣に映る月光に着目しているのがいかにも清女らしい。

一方、源氏物語では作中人物の「臥す」場所を効果的に示して、景を構成している。

⑤「ものけたまはる。いづくにおはしますぞ」とかれたる声のをかきにて言へば、「ここにぞ臥したる。客人は寝たまひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されどけ遠かりけり」と言ふ。寝たりける声のしどけなき、いと似通ひたればいもうとと聞きたまひつ。：「まろはここに寝はべらむ。あな苦し」とて、灯かかげなどすべし。

女君は、ただこの障子口筋違ひたるほどにぞ臥したるべき。「中将の君はいづくにぞ。人氣遠き心地してもの恐ろし」と言ふなれば、長押の下に人々臥して答へすなり。：乱りがはしき中を分け入りたまへれば、ただ独りいとささやかにて臥したり。

(源氏物語帚木・九七)

ここからは声によって、人々の「臥す」位置関係が如実に浮かび上がってくる。源氏は方違えで訪れた紀伊守の邸でも「いたづら臥し」としか思われず、眠れない。すると、北の障子の向こうから人声がする。そつと起きて立ち聞くと、男の子と姉の会話が聞こえてくる。男の子のどこにいらつしやるのと尋ねる声、答える女の「ここ」「け遠かりけり」からは女と自分との距離が測られ、女がすぐ近くの襖障子の筋向いに臥していることと見当を付け、続いて「人氣遠き」と女房を呼ぶ女のことばと返答から、女房たちは廂に寝ており、男の子も廂なので、女は母屋に独りと知る。そこで寝静まるのを待つて掛けがねを引き上げ、侵入する。源氏の方違えと聞いてあわてて準備したのか、唐櫃など調度を詰め込んでごたごたしているなかを分け入ると、女が「ささやかにて臥している」。

女は弟や女房との会話によって期せずして居場所を知らせ、源氏は声で得た位置感覚を頼りに侵入し、横たわる身体を見出す。読者は源氏とともに人々の位置を探り、見取り図を想い描いたろう。ここは就寝の「臥す」で、源氏、女、そして女を取り巻く人々の位置を立体的に立ち上がらせる手法なのである。空蟬巻の侵入でも似た手法が用いられているが、「ただ独り臥したるを心安く思」した女は、空蟬ではなく、継娘の軒端の萩であった。源氏物語は日常生活の就寝場所を示す「臥す」を巧みに用いて位置関係を悟らせるよう、ありありと立体的に状況を構築し、臨場感を高めているといえよう。

三 病いで「臥す」事態

①国の司まうでとぶらふにも、え起き上がりたまはで、船底に臥したまへり。

(竹取物語・四七)

②ただ萎えに萎え臥したまひぬ。女御の君、声も惜しみたまはず、臥しまろび泣きたまふ。：大將殿、：庭に出でて、大願を立てて申したまふ。「この人、え免れたまふまじくは、おのれを殺したまへ。片時遅らしたまふな」と、臥しまろび泣く。：「我が子の身代りに我こそ死なぬ」と、臥しまろび泣く。：入りて見たまふに、いと御腹高くて、息づき、臥したまへり。大將、「我が君は、いかにしはべれとてか、かくは臥したまへる」とて、かき起こして湯参りたまふを、

(うつほ物語国譲下・三七三)

③御几帳の帷子ひき上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思す、ことわりなり。白き御衣に、色あひいとはなやかにて、御髪のと長うこちたきをひき結びてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひ

て、をかしかりけれと見ゆ。

(源氏物語葵・三八)

①は龍の首の珠を獲ろうと筑紫から漕ぎ出した大伴大納言が、逆に疾風を吹きかけられて明石の浜に打ち上げられた時のことで、起き上がることもできず、病んで船底に横たわっている。よくある日常の病臥である。②のうつほ物語と③の源氏物語では、出産間近でお腹の大きい女君が重態に陥っている。②の女一宮は、「萎えに萎え臥」す容態で、母の仁寿殿女御は「臥しまろび泣」き、夫の仲忠も「臥しまろび泣」いて私を身代わりに、共に死なせてくださいと祈る。そんな仲忠に母の俊蔭女も我が子の身代わりに私がと「臥しまろ」び悲嘆して祈るなか、女一宮は仲忠に抱き起こされて薬湯を一口含み、ようやく出産を果たす。うつほ物語では人々が難産の妊婦に悲嘆し、あわてまどい、介助するさまを生き生きと描いているのである。ところが、③の源氏物語では、悲嘆は「よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思す、ことわりなり」と語りはするが、主点は病臥する葵上の美しさを現前させるにある。白衣に長く豊かな髪が束ねられて添っているあざやかさ、源氏は目に映るその姿に「かうてこそらうたげになまめきたる方添ひて、をかしかりけれ」と、これまで感じたこともない、弱い者への情愛「らうたげなり」と感じ、それは欠けていた「なまめかし」が加わったからだとわかって、「をかしかりけれ」と改めて妻の美質を認め、感動している。そのため、手を捉え、「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」と泣き、葵上も源氏を見上げて見つめる夫婦の景となっていく。同じく、夫が重態で横たわる妻を見る光景を描いても、うつほ物語では見守る人々の悲嘆を突出させ、出産に導くさまを描いているが、源氏物語では夫の眼前に横たわる妻の美を描いて、新たな愛を湧き上がらせ、これまでの、鉦が掛け違ったような齟齬を修復していくきっかけとしている。このように源氏物語では病臥する姿の美しさを描出することが多い。

若菜下巻の重態からようやく小康を得た「臥しながら」の紫上の「清らにゆらゆらと」する髪、「白くうつくしげに」透き通るような膚を、源氏は「世になくらうたげなり」と見て、女三宮の見舞いに出かけるのも億劫になっている。柏木巻では不義の男子を出産した女三宮が肥立ちの悪さと源氏の態度に出家を望んで「いといたうはかなげにてうち臥したまへる御さま」なのを、源氏は「おほどきうつくしげなり」と見て「いみじき過ちありとも、心弱く許しつべき御さまかな」と心動かされているし、その相手で重態に陥って「衾ひきかけて臥」す柏木の姿は、見舞う夕霧の目に「白うあてはか」と映る。豊明の夜、重態の宇治大君も薫の目に美しく映り、亡骸も生者と変わらず「うつくしげにてうち臥したまへる」としか見えない。御法巻で夕霧の目に映る紫上も「何心もなくて臥したまへる」姿で「飽かぬところな」く美しいものであった。源氏物語では、病臥する姿や命絶えた者の美を呈示して、見る者の想いや心のありようを描いているといえよう。

四 「臥し」て拒否する女君

平安作品には「臥し」て他を拒否する女君の姿が顕著に認められる。

①心地も苦しければ、几帳さし隔ててうち臥すところに、ここにある人ひやうと寄り来て言ふ、「撫子の種取らむとしはべりしかど、根もなくなりにけり。呉竹も一筋倒れてはべりし。つくろはせしかど」など言ふ。：「いかにせむ。いとからきわざかな。いざもろともに近き所へ」などあれば、いらへもせで、あなもののぐるほし、いとたとしへなきさまにもあべかなるかなと思ひ、臥して、さらに動くまじければ、

(蜻蛉日記中巻・二五二)

ほぼ一ヶ月に及ぶ鳴滝参籠から、兼家に強引に連れ戻された道綱母は、気分が悪いと兼家と几帳を隔てて少し横になる。と、そこへ家人が留守

中の前栽の草木の報告をする。それを聞いた兼家は菩提を求めようとする人が撫子や呉竹に執着しているとはとからかい、方塞がりを知って、いつそのこと二人で方違えしようかと誘う。呉竹のからかいにも「つゆばかり笑ふけしきも見せ」なかった道綱母も、これには呆れて返事もせず「臥し」たままで、動こうとしなかったと語る。後の「臥す」は筆者の兼家への拒否だが、では、最初の「うち臥す」も体調の悪さからだけだったのだろうか。兼家は鳴滝から帰邸する途次も同車して、吹き出しそうな冗談を飛ばしていた。一方、筆者は夢路を辿るような心持ちで「ものも言はれぬ」情態であったというが、これは後からの言い訳であろう。とすれば、兼家との間に「几帳さし隔ててうち臥し」たのも、拗ねて拒否していると考えられよう。

② 返り事書くべくもおぼえねば、ただ衣をひき被きて臥したり。：君は物もおぼえで臥したまへるを、御座直さむとてひき起こしたてまつれば、面赤みて、げに苦しげなるまで御目も泣き腫れたまへり。いとほしうあはれにて、「御髪かきくだしたまへ」とおとなおとなしうつくろへど、「心地悪し」とて、ただ臥しに臥しぬ。

（落窪物語巻一・四八）

落窪物語では、男君に侵入された落窪の君の衝撃が「臥す」で語られている。女君は男君からの後朝の文にも返歌しなかったのだが、ここは男君から再度文が届いたところである。あこぎが「なほこたみは」と返事を促しても女君は「衣をひきかづきて臥し」、応じない。桂を頭からかぶるのは孤に閉じ籠もり、周囲とは関わりたくないとする意思表示にほかならない。あこぎが今宵のためにあれこれと立ち働くなかで、女君は「ものもおぼえで臥し」たまま、髪をとかさうとしても気分が悪いと「ただ臥しに臥し」てしまう。女君があこぎをさえ拒絶するのは、侵入の衝撃だけでは足りない。満足な衣装を身につけていないのを男君に知られ、あ

まつさえ単衣を脱ぎすべして帰って行かれたのである。女君はその恥に耐えられなかった。それが「臥す」という行為となったのである。こうした行為ができたのはあこぎへの甘えでもあったろう。男君の愛を身をもって知り、信頼関係を築いてからはこうした「臥す」は認められない。面白駒からの侮辱的な後朝の文に周囲が不審がり嘆くなか、四君が「起き上がり」もせず「臥し」ているのも同様であろう。現代でならば、寝室に籠って出てこないというところだろう。

うつほ物語ではこうした「臥す」は、楼上下巻で女一宮が仲忠に「なほはや渡りたまへ」（五四三）と誘われても対面せず「寄り臥す」例だけである。婚姻後、仲忠が女一宮に夢中なのに対して、女一宮はむしろそれをうるさがる、という関係がよく現れた事例である。

③ 昼つ方渡りたまひて、「なやましげにしたまふらむはいかなる御心地ぞ。今日は暮も打たでさうざうしや」とてのぞきたまへば、いよいよ御衣ひきかづきて臥したまへり。

（源氏物語葵・七二）

これは光源氏が昼に若紫の西の対に來たところだが、若紫は「御衣引きかづきて臥し」、見向きもしない。この拒絶は昨夜突然、源氏に襲われたせいであるが、けれども、若紫は盗み出される前、嵐の夜に源氏に御帳台に侵入された時でさえ「いといたうも怖ぢず、さすがにむつかしくて眠れず「身じろき臥し」（若紫二四五）ていたが、拒絶はしていない。幼かったこともあったろうが、「なつかしく」語りかける源氏に、なにがなし信頼と共感を抱いたからでもあったろう。そうした過去が語られていたからこそ、衝撃がいかにばかりであったかを如実に語る表現となっている。若紫は思ってもみなかった源氏の行為に怒り、信頼した自身を哀しみ、我が世界を再構築することもできず、同じ空間に源氏が存在することさえ耐え難いのである。

「臥し」て、求められる行為や他者を拒否することは現実の生活でも

よく行われたことであつたろう。しかし、物語ではそれが女君に限定されている。特に多くの女君が登場する源氏物語では、③のほかに、明石巻では明石君が源氏の懸想文に「寄り臥し」、朝顔巻では紫上が源氏に「うち背きて臥し」、若菜下巻では女三宮が柏木の文に「臥し」、柏木巻では一条御息所が夕霧に対面できないと「寄り臥し」、夕霧巻では落葉宮や雲居雁が夕霧を拒否して「寄り臥し」したり「臥し」たりし、御法巻の紫上は気分が悪くなると「几帳を引き寄せて臥し」て対座を終わらせようとし、手習巻の浮舟は中将や尼たちに対して「臥し」、夢浮橋巻では薫への返信を促す尼たちに「顔も引き入れて臥し」て拒絶している。男君たちは「顧みて他を言ふ」こともできるが、女君たちはそうはいかない。そうした女君たちの拒否の表現手段として「臥す」が物語で用いられていると考えられよう。

五 「臥し」て思案する人々

平安貴族の日常では「臥し」たままで過ごすことは案外多かったらしい。

①人の臥したるに、物隔てて聞くに、夜中ばかりなどうちおどろきて聞けば、起きたるなりと聞こえて、言ふことは聞こえず、男も忍びやかにうち笑ひたるこそ、何事ならむとゆかしけれ。

(枕草子心にくきもの三三〇)

②二条には大殿油まありて、少将の君臥したまひて、あこぎに、「日ごろのことよく語れ。ここには、さらにのたまはず」とのたまへば、あこぎ、北の方の心をありのままに言へば、君あさましかりけることかなと思し、臥したまへり。「人少なにて、いと悪しかめり。あこぎ、人求めよ。殿なる人々にも聞こえむと思へども、ゆかしげなき。あこぎ、大人になりね。いと心およづけためり」と言ひ、臥し

たまへれば、

(落窪物語巻二・一四二)

①の枕草子では「共臥し」している同僚の様子を聞いていて、物越しに状況が窺われる環境と知られるのだが、うつほ物語蔵開上巻でも仲忠が仁寿殿女御が女一宮出産の祝宴で頂いた贈り物の分配をしているのを「聞き臥し」、その的確な判断に感心している。②の落窪物語では主の道頼が「臥し」、女童のあこぎの報告を受けて継母への怒りを募らせ、あこぎに女房を集め、そのなかでおとなとなって仕え、女君を邸の主婦として待遇する体裁を整えるようにと命じている。主人と仕える者との関係が髣髴とするが、これも邸の主人としての日常の一端であろう。

③北の方聞きはてて、いとねたしと思ふ。「例の腹立てよ」と言ひつるは、さきざき我が腹立つを聞きたるにやあらむ、語りにけるにやあらむと、いとねたし。つくづくと臥して思ふに、ゆき方なければ、なほおとどにや申してましと思へど、容貌はよし、さきざき直衣など見るに、よき人ならば、もて出でやしたまはむと危くて、なほ「帯刀にあひたる」と言ひなして、

(落窪物語巻一・九七)

③では落窪君に高貴な男が通っていると知った継母が、どうしてやろうかと思案している。男君のからかいのことばを落窪君の告げ口と推測して「ねたく」なり、顔立ちや直衣からすると夫は婿扱いするかも知れないと危惧し、やはり格下の従者風情と契つたと讒言しよう、「部屋に籠めてむ」、折檻しようと結論する。継母が床に「つくづくと臥して」考えをたどり、心を決めていく次第を縷々と描き出しているのである。

④心に思ひ、臥したまへるは、世の中を見れば、言ひ知らぬ人も、しかあれば、才も時にあひ、人々しければこそめでたうかひあれ。人よりことに才ものしたまひけれど、ここにしかひあることもなく、知らぬ世界に、年若うして行き伝はりたまひつつ、悲しき目の限りを見たまひて、多くの年を経たまひて帰りたまひて、うちはばめ、

世の中のこと飽かぬことを嘆きて：すべてよろづに尊からむこと、いかでここにてせむなど、来し方行く末まで、あはれによろづ思ひ、臥したまふ。
(うつほ物語楼上下・五二七)

④のうつほ物語では琴の伝授を続けて季節も移った冬、神無月に俊蔭女が父のことを考えている。伝授を一時中断して休息していると、耳に、仲忠が「唐土の山の山彦聞きつけてそよといふまで響き伝へむ」、祖父俊蔭が山の仙人たちから伝授された琴の音を引き継ぎ、次代にも伝えよう、と覚悟を誦じるのが遠くから聞こえてくる。俊蔭女は「臥しながら」「山彦はそよといふとも調べ置きし人なき宿を見るかひもなし」と秘琴の伝授がうまくいったとしても、それを父に認めてもらえないのなら何の甲斐もない、と琴に合わせてひそかに詠んで、父の、幸いとはいえない生涯に想いを馳せ、どのように心を慰めたらよいのだろうか、と横になったまま、あれこれと供養の方策を思案している。こうした述懐が語られるのはうつほ物語ではここしかない。形容詞の分布からは巻による文体差が考えられるが、これも成立に関わるのかも知れない(5)。

⑤格子上げながらありつれば、ただ独り端に臥しても、いかにせましと、人笑へにやあらむと、さまざまに思ひ乱れて臥したるほどに、
御文あり。
(和泉式部日記五七)

ここでは宮が「夜深く」お帰りになった後、和泉式部が端近に「臥して」、宮邸入りの提案に、自分はどうかしたいのか、出仕すべきかどうかと思案して悩んでいる。「独り」とあるように、宮の思惑や恋情はさておき、「人笑へ」を気にするのは、社会に生きる者として必要な考慮で、自分で決めねばならないことだからである。

源氏物語でも右近が玉鬘の発見を源氏にどう報告したらよいか「思ひ臥し」、宿木巻で勾宮の婚儀に陪席した薫が、前駆が宮の供人を羨むのを耳にして、部屋に「入りて臥し」、宮に並ぶ婿がねとの世評にまんざ

らでもなく、帝も自分を婿にとの思し召しがあるらしいが、もし、現実にならぬのなら、気が進まない自分はどうしたものか、だが、その女宮が亡き大君によく似ておられたならうれいだろうよ、とそれからそれへと思ひ続けているように、自分はどうかすべきか「臥して」て思案する人々の姿があちこちに散見される。こうした「臥して」の思案は、物語では情緒的な停滞に陥っているものではなく、次なる展開に導くものとして描かれることが多い。

六 「臥し」てもの思いする人々

①心もゆかぬ世とはいひながら、まだいとかかる目は見ざりつれば、見る人々もあやしうめづらかなりと思ひたり。ものしおぼえねば、ながめのみぞせらるる。人目もいと恥づかしうおぼえて、落つる涙押し返しつづ臥して聞けば、鶯ぞ折りはへて鳴くにつけて、おぼゆるやう、

鶯も期もなきものや思ふらむみなつきはてぬ音をぞなくなる

(蜻蛉日記中巻・一九三)

この蜻蛉日記では、兼家が来ない夜が三十日余り、昼は四十日余りとなり、あまりにも急な変化、経験したこともない長期間の夜離れに、女房たちも不審がるなか、道綱母は何も考えられず「ながめ」てばかりいる。人目を避けてあふれる涙を堪えながら「臥して」いると、時節外れの鶯が鳴く。つい、今の孤独な自分に引き寄せて詠んでしまったというのだが、こうして「臥して」てもの思いをするのは、当時けっして特異なことではなかったろう。独詠歌となるところが作り日記でもあり、歌人でもあることなのだろうが、和泉式部日記でも「目を覚まして、よろづ思ひ続け、臥したるほど」(四八)、ちょうどその時、宮が門を叩かせたが、折悪しく女房が起きず、お帰りになってしまうと嘆いている。日

常「臥す」ことが多いのであれば、「臥し」て恋のものの思いをするのはいわば日常であつたろう。

②またの年の正月に、梅の花盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、みて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きてあばらなる板敷に、月のかたぶくまで臥せりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

(伊勢物語四段・一一六)

この伊勢物語四段は、姿を消して、手の届かない人となつてしまった女への想いが、巡り来る季節にいよいよ高まり、思ひ出の邸に赴いて、過往を思う段だが、多様な詠みを秘めた和歌も相まって、哀切で情緒纏綿たる段として鑑賞されてきた。一幅の絵画ともなりうるため、古来絵画化されてきており、古今集七四七番にも相似た詞書で認められる。

しかし、この段は詞書に比して、虚構の物語として完結している。それは、詞書に認められない「立ちて見、みて見、見れど」があるからだろう。逆に詞書には「梅の花盛りに」に続いて「月のおもしろかりける夜」が認められる。詞書が梅花に続いて月を呈示するのは、和歌に焦点を絞っていくためだろう。けれども、物語の「立ちて見、みて見、見れど」では生身の人間が焦点になる。片桐洋一氏はこれを歌舞伎のようなおおげさな動作と説かれている(6)が、この動作があつてこそ、男は泣いて夜明けまで「臥す」こととなり、独詠に繋がっていく。男の、女の不在を確認するこの行為が、昔とうつて変わったがらんだの廂に「臥す」行為と独詠を導き出して、恋慕の情が完結し、一編の物語として鑑賞しうるようになるのではないか。

ところが、うつほ物語では、こうした恋のものの思いは語られない。
③この賭弓の御饗に垣間見て後は、臥し沈み、病になりてありしを、

(うつほ物語春日詣二八二)

ここでは仲頼があて宮を垣間見てから、恋煩いに陥って「臥し沈み」、病を發したというのだが、実忠たち他の求婚者の場合も「臥し沈む」と語られるだけで、ものの思いをするとは語られず、まして「臥して」もの思いをする場面は認められない。うつほ物語は恋煩いは語るのだが、恋の「ながめ」は語らない。しかし、源氏物語はそれをこそ語る。けれども、それを述べるには既に紙幅が尽きた。

七 おわりに

平安の散文作品に「臥す」記述が少なくないことから、その用法を

A 就寝 B 病臥 C 横臥 D 情交 E 常時

に大別したが、そのうちA就寝・B病臥・C横臥について、日常を彷彿とさせる例から当時の生活を探り、そこから文学への形象を探ったところ、文学の「臥す」表現は二・六の型として認められた。そのうち、Cの横臥については、はからずも高橋文二氏が平安の貴族女性は「うたたね」「まどろみ」の刻を多く過ごし、その芳醇な時間が創作を醸成していったと日常から創作への道を説かれている(7)が、本稿では逆に、作品の「臥す」表現をもつて、日常から文学への道を辿ることとなった。

①よき薫き物焚きて独り臥したる。(枕草子心ときめきするもの・六九)
②をかしかりつる人のなごり恋しく、ひとり笑みしつつ臥したまへり。

(源氏物語若紫・二四七)

①の枕草子では独りの刻を、自分のために美意識をもつて快適に過ごす満足が表明されている。女であればよくわかる独りの刻の過ごし方である。二④の就寝の場合も、美的な景と捉えても、眠る姿ではなく、月光と衣の情景に焦点を当てていた。枕草子には「ながめ」が四例しか認められないことを思えば、これもまた作品の性格の一端(8)をよく表し

ているといえよう。②では光源氏が帰邸して、昨夜、若紫に強引に寄り添って過ごしたことを満足をもって思い起こしながら横になっている。源氏物語唯一のプラス表現だが、「臥す」表現では、これまで見てきたように、病や応対の拒否、思案や恋のものの思いなど、どちらかといえば愉しくない場合が目につく。しかし、現実の日常生活では枕草子のように「臥して」独りの豊かな時間を過ごすこともあったろうし、恋の一夜に幸福な想いで「うち臥す」ときもあったろう。また、「臥しながら」来し方、行く先を思つて、愉しくなったり、心弾む計画を立てたりすることも当然のことながらあったろう。けれども、文学ではどちらかといえば憂愁の想いとして形象化することがもつぱらで、それは根来司氏が八代集の和歌の性格について説かれたこと（9）とも重なっているように。源氏物語の独自の型やそこからの場面形成については稿を改めたい。

注

- 〈1〉古今集は新編国歌大観、その他は新編日本古典文学全集を用いた。引用文も同じ。私に表記などを変えたところがある。引用文には括弧中に、作品名・巻名や段数・頁数を示している。
- 〈2〉拙論『『臥す』の文学史―源氏物語以前』（『梅花女子大学文化表現学部紀要』一五号、二〇一九年三月）。「うつぶし臥す」は落窪物語三例、源氏物語二例、紫式部日記一例。「かたはら臥す」は源氏物語三例。
- 〈3〉拙論「源氏物語の文体と感情表現」（『日本語学』二二巻、二〇〇三年一月）
- 〈4〉注〈2〉の拙論
- 〈5〉情意性形容詞の偏向が巻によって際だっている。これについては稿を改めたい。

- 〈6〉『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』（角川書店、一九七五年一月）
- 〈7〉「王朝まどろみ論―女流文学一面―」（『王朝まどろみ論』笠間書院、一九九五年五月）
- 〈8〉拙論「枕草子論―非『ながめ』の文学」（『平安文学研究』五六輯、一九七六年一〇月）
- 〈9〉「中古和歌の語彙」（『古代の語彙』明治書院、一九八二年五月）